

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

声をかけ手を差し伸べる大切さ

京都市立加茂川中学校 三年 杉 いおり

「住むところがなかつたから、犯罪をして少年院を家にするしかなかつたのです。」

ある青年が言ったこの葉に私は衝撃を受けた。彼は複雑な家庭環境で育ち、家族から虐待も受けっていた。その環境から居場所を作るために、窃盗をして自ら少年院に入ったのだ。私は彼が少し微笑みながら優しく語る姿に、最初は「本当だろうか?」と疑った。犯罪や非行を起こした人はとても怖いイメージがあつたが、彼はそのイメージとはむしろ真逆で穏やかで素直に質問への受け答えをしていたからだ。しかし、その様子をしほりく見ていると、彼の語りの中に彼の愛情に飢えた淋しさと、深くて大きな心の傷をひしひしと感じた。当時、今の私と同じくらいの年齢だった彼にはとても重く苦しい毎日だっただろう。自分ではじつある事もできぬる環境の中で私なら耐えられるだろうか。

私たちがよくユースで見る犯罪も「優しい人」だったのに。とか「まさかあの人」が。などのインタビューをよく見る。最近のSNSのトラブルも、「え? こんなにかわいい高校生が、こんなにひどいアンチ「メンントするの?」とびつぶつとつぶやく」ともある。こういった行動も彼らの置かれている環境や傷ついた感じからきしてくることが多い気がする。そういうきっかけは案外身近にある小さなことの積み重ねだつたりするのではないか。

それを聞いて私もがっかりしたが、その話を聞いた曾祖母が悲しそうに「何か理由があるのかもしけないけど、言つてくれたらいいでもどうせあげるのにね。一度ひのこひのこをしてしまつたら、罪悪感なく繰り返してしまつかもしけないね。」とまつりと囁つた。そんな事があった数日後に、曾祖母は知らない女性が自宅前の小さな畑の作物を物色してゐる所に遭遇した。「一言声をかけてくださいたらおわけしますから。」と声をかけたり、女性は申し訳なさそうに深く礼をしてその場を立ち去つたそうだ。これがから声をかけることで、彼女の犯罪にストップをかけることができた。もしかしたら、最初の青年もニュースに出る人たちも、盗むとしたおばさんも、今の環境がそういう行動をさせてしまつたのかもしえない。しかし、一時的な気の迷いだとしても、いつの行動は社会からみ出してしまつ原因になる。そんな負のループから声をかけて彼らを救い出し、受け止めて許すことも周囲ができる犯罪防止の小さな一歩かもしれない。彼らが非行や犯罪に走る小さなきつかけがそこにあるように、私たちの小さな声がけがきつかけで誰かを救い出せることもできるのではないか。

学校生活でも同じようなことがあった。いつも絡んで嫌なことを言つたり、ありもしなじ蹲を流したりする子がいた。最初はその行動が何故かよく分からなかつたが、周りが呆れてほつておいたら、もっとエスカレートしてきた。その話をしたら母が言つた。「その子は、きっと淋しいんだね。イライラやストレスを抱えて、それを抱えきれなくなつて聞じてほしーーと心が叫んでるんだよ。案外聞いてあげたりもいしなじかも。」その時は正直「面倒くさいな。」とも思つたが、今は少し違つた角度でその子のことを理解することができるのである自分がいる。

人はどんなに強くてもやはり一人では生きていけないのだ。誰かと関われば、時には自分と違う相手を理解し、お互いを理解しようとする努力も必要となる。そういうことこそが自分の居場所を見

つたの」ともできるのかもしれない。

そして、人は人生の中で、大なり小なり數え切れない失敗を重ねる。しかし、それを失敗とどう見るのではなく、生きていくための通過点や出来事とどう見る事も必要なのだ。犯罪は悪いことだ。しかし、その裏には様々な事情も見え隠れする。何故そうしてしまったかをきちんと理解し、私たちが一緒に支えていくことが大切なのだ。一度失敗して、たとえ道を外れても、人生は何かのきっかけさえあれば、いつだって何度も新たなる道を作れるのだから。

私自身も、これから色々な経験をして、その度に多くの失敗を重ね悩むこともあるだろ。そんな時は自分にできるベストを考え、ポジティブに物事をとらえて自分の道を進んでいきたい。そして、誰かの心にホッとできる居場所ができるのを願って、私はこれからも沢山の人と関わりながら、迷わず声をかけ続け手を差し伸べていきたい。

審査員からのメッセージ

犯罪は悪いことだという前提に立ちつつ、周囲ができることや失敗をした時の心の持ち方など、作品を通して淀みなく作者の考え方や思い、決意が述べられていました。また、窃盗をして自ら少年院に入った少年の言葉、畑に植えられた杏の実が盗まれた時の曾祖母の言葉、ありもしない噂を流す子に対する母の言葉など、様々な印象に残る「言葉」が随所に登場し、作品に引き込まれました。読み手自身にも「犯罪や非行のない社会づくりを進めていく上で自分に何ができるのか」を考えさせるような、訴える力のある作品だと思いました。

また、一文一文を推敲し、漢字をしつかり調べ、一文字一文字を丁寧に書き上げたことが伺え、作者の努力が伝わってきました。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

可能性の扉を開くたつた一つの「機会」

木津川市立木津中学校 一年 津田 新大

「社会を明るくする運動」の田舎として「立ち直り」に寄り添い、犯罪や非行のない社会へ」は正直なところ、僕には少し遠い世界の話のようを感じていた。ニュースで報じられる事件は、自分とは違う「誰か」が起こすものであり、僕たちの日常とは切り離された問題だと思っていた。大きな事件がニュースで報じられていても、僕は「また、あほな誰かがやらかしそうだ」としか思わなかつた。しかし、一人のクラスメイトとの出会いが、その考えが浅はかな固定観念に過ぎなかつたことを、強く教えてくれた。

小学生の時のクラスメイトだった彼は、授業中いつも窓の外をぼんやりと眺めているか、机に頭をぶせていることが多かつた。言葉遣いは少し乱暴で、提出物を忘れることがよくあつた。小学校の簡単なテストでも結果はいつもほんとによくなかつた。先生たちもどこかあきらめているような雰囲気があつた。僕自身も、彼に対する勉強が嫌いで、やる気がないやつなんだなど決めつけていたように思つ。

その彼と深く関わるようになつたのは、席替えで隣同士になつたことがきっかけだつた。僕はそろばんを翻つていて算数は得意だつた。だから、算数の授業でいつもプリントをおわらせてしまつて暇だつた僕は彼に算数の計算の仕方を教えてあげた。その日から、僕たちの距離が少し縮まつた。彼が分からなかつたのは、図形や文章問題のような応用的な内容ではなく、割り算の仕方、分数の意味など彼がつまづいていたのは基礎の基礎だつた。「こんなことも分からぬのか。」一瞬をつ感じかけた自分を恥ずかしく思つた。僕が当たり前のように受けってきた教育、親や兄に勉強を教えてもらつて

いた事、分からぬ時すぐ質問でもた環境、それらが、彼になかつたのかも知れない。僕が持つてた当たり前は、決してすべての人ものではなかつたのだ。

僕は教え方を変えた。難しい言葉を使うのをやめ、彼がどうでなぜつまづいたのかを時間をかけて探し続けた。分数の割り算を教えるときは、僕は絵を描いて説明した。「ああ、逆数をかけるってそういうことか。」初めて心から納得したような声を出した彼の顔を、僕は忘れることができない。たつた一つ、つまづいていた所が理解できただけなのに、彼はこれまでため込んでいた疑問を僕にぶつけ始めた。それから、あれほど嫌つていた勉強に、彼は少しづつ前向きに取り組むようになった。小テストで目標の点数を取れた日には、照れくさそうに笑つてくれた。その笑顔は、僕が知つていた彼のどの表情とも違つて、自信と喜びにあふれていた。

一人の人間が、たつた一つの機会によって、その可能性の扉を自分の手で開いていく瞬間を僕は見た。彼に足りなかつたのは、能力や才能ではなかつた。誰かに自分のレベルまで降りてきてもいい、時間をかけてつき合つてもいいという小さな機会だつたのだ。

この経験は、僕の田舎を社会全体へと向けさせた。非行に走つてしまつ子たちも、もしかしたら彼と同じなのではないだろうか。家庭の事情で誰も勉強をみてくれなかつたり、学校で一度つまづいたまま誰にも助けを求められず、自分だけがおどりていて感じるのではないか。そう考えると、「社会を明るくする運動」がかかる「立ち直り支援」の本質が見えてくる気がした。それは、罪を犯した人に罰を与えるだけで終わらせるのではなく、彼らがもう一度人生をやり直すための「学びの機会」や「人との信頼関係を築く機会」を提供することなのだと思つ。そして、より根本的な「犯罪や非行の防止」とは、社会のすみずみまで、彼に訪れたような「機会」が行き渡る仕組みを作ることではないだらうか。

僕にできることは、まだ小さい。しかし、無力ではない。まあほ、



自分の周りにいる友人に対して、先入観や決めつけをやめる」と。困っている様子の人がいれば、「どうしたの?」と声をかける勇気を持つこと。彼に教えたつもりが、本当に大切なことを教わったの

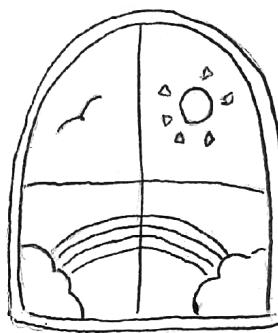
社会を明るくするとは、じかの誰かがわざわざ大きな突破口ではない。僕や、みんなの一つの行動が、隣にいる誰かの可能性の扉を開く鍵になるかもしれない。その小さな鍵をあきらめず、根気強く多くの人が手渡し合っていこう。その先に、「犯罪や非行のない、誰もが輝ける社会」という光があると、僕は固く信じている。

審査員からのメッセージ

小学校時代のクラスメイトとのやり取りの描写が具体的で、作者が勉強を教えていた光景や、心から納得したクラスメイトの表情が思い浮かんできました。飾らない言葉で表現されていて、とても親しみやすさを感じる作品でした。

作者はこの経験から、非行に走つたり罪を犯してしまった人の周囲にいる人の行動や環境が大切であることに気付き、そしてさらに一步前に考えを進め自分にできることは何かが述べられており、犯罪や非行のない社会をつくっていくことを深く考えた心の様子がうまく表現されていました。

本作品は、「京都府推進委員会委員長賞」とともに、全国表彰として「日本工艺の連盟会長賞」を受賞されました。おめでとうございます。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

信じてくれる人の温かい存在

福知山市立南陵中学校 二年 下司 帆乃果

私はこの作文を書くにあたって、「一度失敗した人に、再犯を起こさせないためにできることはなんだろう?」という先生の質問について考えていました。反省している人でもなぜ、再犯してしまうのか。学習の中で私は、誰からも信じてもらはずに、社会から孤立していき、会社にも雇つてもうえず再犯せざるをえない状況に陥ってしまっていると知りました。反省しているのか信じられない、一度犯罪を犯してしまっている人はまたなにかするかもしないといふ人々の不安と疑い。私ももし、「反省しました」、「改心しました」と言わざるも、すぐには受け入れられないし信じれないと思います。でも、そのなかで信じて受け入れてくれる人がいたら。社会復帰に向け支えてくれる人たちがいたら。再犯をせず、真っ当な人生がやり直せるのではないかでしょうか。

「信じて、待つて、私のために動いてくれる人がいたから」これは私の知り合いが不登校から立ち直れた理由です。

今では楽しく高校生活をおくっている彼女ですが、彼女には中学の頃、いじめが原因で、不登校になつた経験があります。そんな彼女は、どうして立ち直ることができたのか。まだ小さかった私はその場の好奇心で、彼女に尋ねました。

すると彼女は、

「うーん

と、少し考えたあと私の方を見て、

「母さんとか先生とかいろいろいっぱいの人があつと私のためにいろんな選択肢を探して、いろんな方法を試して、私が行動するのを待つてくれてた。それでも私が動けなくとも、辛抱強く待つて

てくれた。離れていく人も無理だと黙つてくる人ももちろんいたよ。でも、ずっと私のために何かしてくれていて、そんな自分を信じて動いてくれている人達のために自分も変わらなければならないと感じたんだよね。

行かなくなつた学校や習い事の席。いつも来るかもわからないのに私の席を空けておいてくれたの。ずっと信じて待つてくれていたのかな。信じてくれていたんだと思う。そんな人たちがいたから、私は立ち直ることができたの。」

と昔を思い出していけるような表情で少しうれしそうに答えてくれました。

こんなキラキラした話は他の人からすると一見作り話のようなうまいといった話かもしれないけど、彼女からこの話を聞けて、人が信じて待つてくれる温かさつてこんなに人を変えることができるのかと幼い私は当時、とても衝撃をつけ、感激したのをよく覚えています。

私がもし、彼女の立場になつて学校に行けなくなつたと考えたら、自分が嫌になつて、行けないことに苦しんで、一人孤独でずっと自分を責め続け、塞ぎ込んでいるんじゃないかと思ひます。想像しただけでも、気が重くなるようなそんな気持ちをずっと抱えて一人、真つ暗な世界でもう立ち直れないかもしれない。でもそんななか、母や先生、習い事の先生など、だれかが自分のことを信じてくれて、いる、待つてくれている。そんな人の存在はとても大きく、希望の光となつて照らしてくれると思います。そんな人達がいるから、人は前を向いて一步踏み出していけるのではないかでしょうか。

それは、自分が犯してしまつた罪を反省し、気持ちを改めた人に同じようなことが言えると思います。

反省した自分を信じてくれて受け入れてくれる、会社や家族。そんな信じて待つてくれる人がいるだけで、人は変わることができる。再犯をする人も少なくなると思います。

審査員からのメッセージ

罪を犯してしまったことは許される」とではない、許せない人もいるかもしれません。だからまた、罪を犯すことがないようになります。同じ過ちを繰り返させないために、私たちはその人たちの気持ちを信じて、更生できる温かい社会を作っていくべきだと思います。そんなふうに信じて受け入れる社会を作っていくことで、社会はきっと明るくなっちゃう。私はそう思します。

